

青少年委員会 公開シンポジウム

“新時代テレビ” いま、制作者たちへ

日時 2012年2月10日(金)

BPO

放送倫理・番組向上機構

放送と青少年に関する委員会〔青少年委員会〕

開 会 挨拶



放送と青少年に関する委員会・委員長 汐見 稔幸

お忙しい中、本シンポジウムのためにお出でくださいましたことを、まず最初に感謝申し上げます。本シンポジウムの基になっておりますのは、「“新時代テレビ”～いま、ドラマ・バラエティ制作者666人は～」という報告書を作成するために行った調査であります。現場の第一線で責任を持って番組を作っている方々、今回はバラエティとドラマですが、その制作者の方々に、どういう問題意識を持って今制作にあたっておられるのかについて、アンケートに答えていただくことになりました。

これは63項目もあるアンケートだったのですが、800人余りの方にお配りして、666人の方から回答していただきました。大変な高率だと思います。おかげさまで、今現場で制作されている方が、実際にどういう問題意識で作られているか、これほど詳しく結果として出された調査はないんじゃないかと思われるようなものが出来上がりました。あとでご報告いたしますけれども、ご協力くださった放送関係者の方にまず感謝申し上げます。

本シンポジウムですが、テーマはバラエティ、それからドラマであります。若者たちが、もっともよく見ているのがこの二つですね。テレビを見ながら、あるいはラジオを聴きながら、それを自分の青少年時代の楽しみの一つにして生きているわけです。実は人間がこの社会を作って生きてきた初めから、ドラマやバラエティっていうものを楽しむっていう、大事な習慣があったように思います。

もう二千数百年前の古代のギリシャの都市でも、人々が集まってギリシャ神話を誰かが語り、それを若者が聴くっていうのが習慣だったと言われていました。語る人のことを文字がない時代は「アオイドス」、文字ができてからの読み語り人を「ラプソドス」といいました。ラプソディの語源です。それがそのあと芝居の形になったのが、いわゆるギリシャ悲劇です。で、このギリシャ悲劇には喜劇と悲劇という形がありまして、悲劇がドラマになり、喜劇がバラエティの形に進化してきていると、非常に大雑把に言えば言えるわけです。日本にも伎楽、田楽、猿楽など、似た形の楽しみ方があったと思われまます。かつては、外に行かなければ見られなかった、楽しめなかったものが、家の中で楽しめるという大きな変化ありますが、人間がそういうものを求めているっていう本質はずっと昔から変わることはないと思います。

しかし、その作成する番組がどのような内容で、どのような質のものになっているかというのは、場合によっては、番組を見る若者たちの生きざまを決めていくほどに大きな影響を与えます。そういう意味で、番組の中身・質について、私たちは関心を持たざるを得ないのですが、残念ながら、制作している現場と、それを見て楽しんでいる視聴者との間に、それほど太いパイプがあるわけではありません。その事情も最近はずつネット社会になってきて、変わりつつありますが、そのパイプをどう生かして番組を制作しているのか、そのあたりのことをもう少し明らかにしたい。それから、視聴者と制作者の関係が今後どう展開していけば、よりいい番組が作れるようになるのか、そのあたりのことについても模索していきたい、これが本シンポジウムのテーマであります。

視聴者がある意味では番組によって鍛えられるという面がありますが、番組制作者も視聴者によって鍛えられる面がある。両者には深い依存関係があると思っていて、いい方向にその影響関係が進化していくための在り方をぜひ模索したい。今日のシンポジウムが、そういうことの一環になればと願っております。あとでフロアの方からもいろいろ意見をいただく機会があると思いますので、ぜひ積極的に参加していただき、実りあるシンポジウムにしていきたいと思っております。よろしくお願いたします。

目次

第1部・調査研究発表 1

「“新時代テレビ”～いま、ドラマ・バラエティ 制作者666人は～」報告

報告者：萩原 滋（青少年委員会委員・慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所教授）

第2部・パネルディスカッション 57

「“新時代テレビ”～いま、制作者たちへ～」

パネリスト：杉田 成道（演出家・映画監督）
 桧山 珠美（テレビコラムニスト）
 宇野 常寛（評論家）
 汐見 稔幸（青少年委員会委員長・白梅学園大学学長）
コーディネーター：
 小田桐 誠（青少年委員会委員・ジャーナリスト）